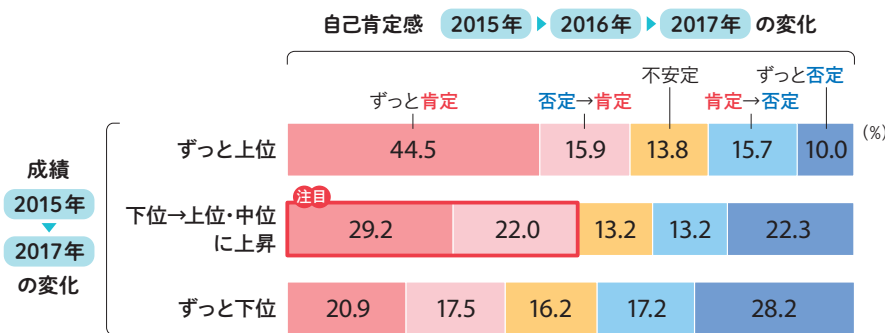


## 成績の向上やクラスへの帰属意識が、 生徒の自己肯定感を高める鍵に

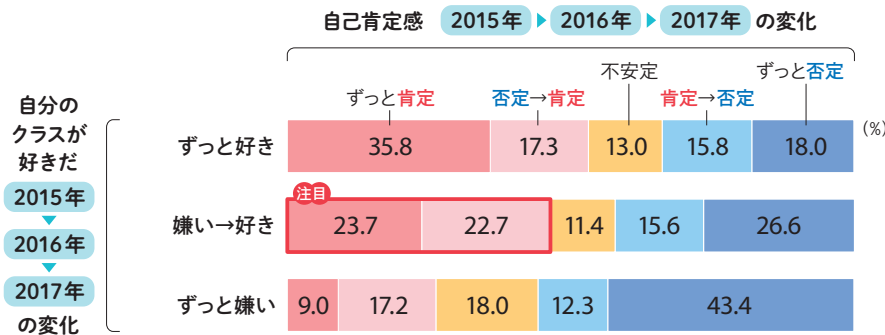
ピックアップデータ 東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所  
「子どもの生活と学びに関する親子調査」(\*1)

データ1 「成績の変化」と「自己肯定感の変化」の関係 (小中高全体)



注1) 2015年から2017年にかけて「小4生→小6生」「中1生→中3生」「高1生→高3生」の子どもの対象に集計。  
注2) 成績は、小学生は国語・社会・算数・理科、中学生・高校生は国語・社会・数学・理科・英語の自己評価を合計し、各年について「上位」「中位」「下位」に三分した。成績の変化は、2015年と2017年の2時点のデータを用い、「上位→中位・下位」「中位→上位」「中位→中位」「中位→下位」の各群は図から省略した。回答者全体に占める比率は、「ずっと上位」20.4%、「下位→上位・中位に上昇」14.6%、「ずっと下位」23.9%。  
注3) 数値は小数点第2位を四捨五入しているため、合計が100%とならないグラフがある。

データ2 「クラスへの愛着の変化」と「自己肯定感の変化」の関係 (高校生)



注1) 2015年から2017年にかけて「高1生→高3生」の子どもの対象に集計。  
注2) 「自分のクラスが好きだ」に、「とてもあてはまる」「まああてはまる」と回答した子どもを「好き」、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」と回答した子どもを「嫌い」とした。変化は、2015年、2016年、2017年の3時点のデータを用い、好きと嫌いを交互に繰り返したケースは「不安定」として図から省略した。  
注3) 数値は小数点第2位を四捨五入しているため、合計が100%とならないグラフがある。

だと言えよう。

学力を高める教育活動や、クラスへの帰属意識を高める学級活動の充実を図ることは、生徒が自分自身を肯定的に受け入れ、前向きに高校生活を送る上でも重要な視点

だと言えよう。 新学習指導要領で重要性が示されている自己肯定感。国立青少年教育振興機構が高校生を対象に行った調査(\*2)では、「自分はダメな人間だと思ってしまうことがある」という設問の肯定率において、日本の高校生は約73%だった。同様の設問に対して、中国は約56%、米国は約45%、韓国は約35%であり、日本の高校生は他国と比較して自己肯定感が低いことが分かる。

自己肯定感を高めるヒントを見いだすため、ベネッセが東京大学と共同で実施した調査の結果を分析した。それによると、自己肯定感が「ずっと肯定」または「否定→肯定」に変化した生徒の比率は、成績が「ずっと下位」のままの生徒(38.4%)よりも「下位→上位・中位に上昇」した生徒の方が高く(51.2%)、成績の上昇が自己肯定感に影響していることが分かる(データ1)。同様に、自己肯定感が「ずっと肯定」または「否定→肯定」に変化した生徒の比率は、自分のクラスが「ずっと嫌い」のままの生徒(26.2%)よりも、「嫌い→好き」に変化した生徒の方が高く(46.4%)、クラスへの帰属意識が、自己肯定感に影響していることが分かる(データ2)。

\*1 東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所が共同で立ち上げた「子どもの生活と学び」研究プロジェクトによる調査。2015年から毎年、小学1年生から高校3年生までの親子約2万組に調査している。 \*2 「高校生の生活と意識に関する調査報告書—日本・米国・中国・韓国の比較—」(2015年)。肯定率は、「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計値から算出。